

学位論文の要約

叙述形式と東アジアの近代——中国清末期に対する考察

森岡優紀

一九〇二年、梁啓超は「史界革命」と「小説界革命」を提唱した。これは中国の旧来の学術体系のなかで最も重要な位置を占めていた「歴史」と「文学」に対する近代的改革を提唱したものであった。しかしこれらが提唱された後に、直ちに近代的歴史学と近代文学が成立した訳ではない。「史界革命」と「小説界革命」は大きな反響を呼び興し、多くの試みがなされたが、実際に成立する道程はより複雑であった。本論文はこの過程を梁啓超と魯迅という二人の人物の初期の作品に焦点を当てて、詳細に分析した。

第一部「近代的伝記の成立過程」では、近代的伝記がどのように成立していったのかについて考察をした。先行研究は「伝記文学史」の枠組みで行われており、清末において実際に西洋の伝記がどのように受容されて、知識人の伝記に対する認識が変化したのか、また実際の作品はどのような過程を経て現れてきたのかという実証的な考察はほぼ行われてこなかった。これに対し、本論文では梁啓超の初期の作品を詳細に分析することでその経路を見出した。

第一章「『伝記類』から近代的伝記へ：清末の西洋伝記翻訳を中心にでは」では、十九世紀後半において宣教師の雑誌に掲載された伝記を概観したうえで、黎汝謙訳『華盛頓全伝』（ワシントン・アーヴィング著“*Life of George Washington*”の翻訳）について詳細に考察した。『華盛頓全伝』は短編の略伝しかなかった時代において、唯一の西洋伝記の特徴的な体裁を備えた伝記であり、当時の先進的知識人に西洋伝記を認識させる上で大きな役割を果たした。黎汝謙はこの伝記をアメリカ史とみなして翻訳した。梁啓超は黎汝謙の考え方を受け継ぎ、『華盛頓全伝』を『時務報』に連載した。直後に康有為や梁啓超などは多くの伝記の創作と翻訳を行ったが、これは伝記が近代的改革への認識を深化させる役割を果たせるためであった。中国史、中国国民国家史が未だ書かれていなかった時代において、近代的伝記の誕生は清末の西洋知識受容の一環であるとともに、近代的歴史の別形式として生まれたことを明らかにできた。

第二章「伝記とイデオロギー：『殉難六烈士伝』」。この章では『戊戌政変記』の一部であり、戊戌政変で処刑された六人の伝記『殉難六烈士伝』について論じた。「殉難六烈士伝」は信憑性の高い史料として多くの歴史書に引用されてきた。しかし「殉難六烈士伝」は梁啓超の体験に基づいて書かれたのではなく、「我史」や「清国殉難六士伝」等を編集して作成されていた。また「殉難六烈士伝」は人物の実績を簡潔に記述した旧来の「伝」という形式を取りながらも、マス・メディアという近代的な媒体を利用し、伝記を通してイデオロギーを普及する試みをもって作成された画期的な作品であったと論じた。本章では、「清国殉難六士伝」を歴史の史料とみなすのではなく、「殉難六烈士伝」や康有為の「我史」との関係から分析するという新たな角度から論じたものである。

第三章「近代史としての伝記：『李鴻章』」。この章では一九〇一年に梁啓超が創作した『李鴻章』について論じた。『李鴻章』は中国で初めての近代的伝記であるが、詳細な分析は行われてこなかった。この章では、先行研究で指摘されたことがない日本の伝記および『中東戦紀本末』の影響関係について初めて分析した。梁啓超の『李鴻章』は、構成において吉田宇之助『李鴻章』と早田玄洞『李鴻章』から影響を受けている。しかし、日本の伝記は李鴻章の人物像に焦点が当たっており、歴史事件に対しては詳細に記述していない。これに対して、梁啓超の『李鴻章』は、例えば日清戦争を論じた第七章では、日清戦争に至る過程、戦闘の状況、敗北の原因などを詳しく描写している。これらの記述は日本の伝記よりも『中東戦紀本末』と共通点が多く見られることを指摘した。また、同時に梁啓超が『中東戦紀本末』に掲載されている電報を用いて『李鴻章』を作成していることも指摘した。このように、先行研究が梁啓超が凡例で述べたことに則って『李鴻章』を評価するのみで具体的な分析をしていないのに対し、本論文は『李鴻章』のテキストに対して詳細な分析を行い、その成立過程の一端を明らかにした。吉田宇之助『李鴻章』と早田玄洞『李鴻章』、および『中東戦紀本末』と梁啓超『李鴻章』と関係は、先行研究において論じられたことがなく、本論文での指摘が最初となる。

第二部「近代写実小説の成立過程」では、中国において近代小説がどのように成立していったのかについて考察した。先行研究は魯迅の思想形成のみに集中しているのに対して、本論は、魯迅の初期翻訳を創

作年代を追って詳細に分析し、魯迅が近代小説の形式をどのようにして見出していくのかを解明することができた。また物語理論に基づき近代小説成立の経路を考察し、近代小説の誕生自体が近代的な叙述形式の完成に拠っていることを実証的に明らかにした。

第四章「伝統的小説観の転換と日本政治小説の翻訳」は、梁啓超の伝統的な小説観の転換と日本政治小説翻訳について考察した。「佳人奇遇」と「経国美談」は全く異なるスタイルで翻訳されている。これは知識人たちは啓蒙のために小説のかたちを読者に合わせて変えていたためである。本章は、日本政治小説の翻訳の形式から当時の小説形式への考え方を探り、当時の知識人の近代小説の形式に対する認識を明らかにした。

しかし、彼らは近代小説形式の本質を理解していなかったために、「小説界革命」において近代小説が成立することはなかった。実際に近代小説の形式に対する自覚をもち、近代小説を完成したのは魯迅であった。第五章から第八章までは、魯迅の初期の翻訳創作を通して、近代小説の成立過程を辿った。

第五章「物語と啓蒙：明治期科学小説の重訳」では、魯迅が留学してまもなく翻訳翻案したヴェルヌの「月界小説」と「地底旅行」について論じた。これらの作品は旧小説の形式で翻訳されていたが、テーマに沿った統合的な構成に変えられており、生き生きと目前に情景が浮かぶ場面作りがなされている。二作品からは、魯迅の近代的小説の特徴に対する初期的な認識を窺うことができる。「月界小説」と「地底旅行」について、思想面からの考察は存在するが、形式面からの分析した論考は本論文が初めてである。

第六章「叙述と啓蒙：『スパルタの魂』と明治期の雑誌記事」では、魯迅が拒俄事件をきっかけに書いた「スパルタの魂」について考察した。「スパルタの魂」は明治期のギリシアに関する歴史書のみならず、明治期の少年雑誌や婦人誌に掲載されたギリシア関連記事をも参考に作られている。「スパルタの魂」は、先行研究が指摘している単純な愛国主義の称揚よりも、むしろ明治日本から中国留学生への思想的連鎖の結果として創作された作品である。ヴェルヌの「月界小説」と「地底旅行」の翻訳は旧章回小説を模倣した民衆教化のための小説のかたちとするならば、「スパルタの魂」は語り手がひたすら自らの思想を語る型の小説形式であるといえる。本章で、明治期の少年雑誌や婦人誌に掲載されたギリシア関連記事が使われていたことを初めて指摘することによって、作品を新しい角度から分析することが可能となった。

第七章「近代小説の翻訳と形式：『域外小説集』」では、「域外小説集」所収の魯迅訳の三編について論じた。魯迅の翻訳作品は近代小説のなかでも重要な特徴である「焦点法」を用いている。そのため既にこの時期に魯迅は近代小説の形式とそれがもたらす効果について自覚していたのではないと思われる。先行研究では、文言で翻訳された「域外小説集」は遅れた思想と形式の名残を引きずっている作品と見なされ、新しい翻訳とはみなされてこなかった。これに対し、本論文は「域外小説集」は「近代小説」の重要な特徴である「焦点法」を用いた斬新な翻訳であったことを初めて指摘した。

第八章「近代小説形式の萌芽：文言小説『懐旧』」では、魯迅が初の近代小説とされる「狂人日記」の前に書かれた一九一一年「懐旧」という作品について論じた。「懐旧」の語りは一貫して少年「僕」の視点に限定されている。しかし作家が少年の語りに伝統社会の構造を批判的に見る視線を滑り込ませており、そのため少年の認識範囲を越えた内容も含まれている。しかし読者は「僕」の目を通して小説世界を見るので、それを意識することはない。このように小説内では近代知識人の視線からみた中国伝統社会の分析と少年「僕」の眼から見た世界が、語りのなかで上手く融合されている。魯迅の小説のなかで、「懐旧」は文言で書かれていることによって近代小説とはみなされてこなかったため、ほとんど論じられることの無い作品であった。本論文はこの作品の近代小説としての特徴を指摘し、作家の有する近代的意識と小説の「写実」を結びつける方法が提示された初めての小説であることを論じた。

上述の考察を通して、本論文は伝記と小説の形式が古い形式から新しい形式へと転換する過程を、テキストの詳細な分析を通して明らかにした。この考察は、「近代」が如何に成立したかという問題を先行研究にはない新しい角度から考察するものである。